

広報誌「うめ」

叶匠壽庵

烏梅

2023 年夏 Vol.42





野の花径 | 撮影：丹澤愛継

よく晴れた午後、久しぶりの散歩
空腹にトーストと久しぶりの珈琲
忘れていた、何もない時間

急にスピードを落とした世界に
そこにあるものをただ、眺める
木々、山、鳥、虫、風
これはぜんぶ地球のもの

ここで過ごしたたくさん記憶が
ゆつくりと帰ってくる
あの日見た空、蛍、炎、匂い、影
ちよつと浮き足立つ感じ

この時間は私だけのもの

たなかちか
田中知香
平和堂石山店

近江の台所《その39》

八日市きゅうり

さかいあやこ
酒井綾子

商品部商品課

きゅうりの原産地はインド西北部、ヒマラヤ山脈南部山麓。果実成分の約95%が水分で、暑い地域では水分補給用として重視されてきたと聞く。日本では平安時代から栽培され、盛んになったのは昭和初期から。なぜもと早く普及しなかったのか。所説は様々だが、味が薄く小毒(苦味)があったから。また江戸時代ではきゅうりの種の周囲の模様が徳川家の葵の家紋に似ているため武士が嫌った、など理由は定かではないが時間を要したことは確かである。現在は品種改良もされ、生食用野菜としての収穫量は上位を占めている。



八日市きゅうり | 撮影：酒井綾子

取材に訪れたのは滋賀県東近江市旧八日市地区。湖東地域にある古くからの市場町で、聖徳太子の時代から毎月「八」の付く日に市が開かれていたのが地名の由来になったという。八日市の名が付いたきゅうりにはどんな特長があるのか。数日前に関西を大雪が襲った2月初旬、道沿いには積雪が多く残る寒い日に、JAグリーン近江の井口太輔さんにお会いすることができた。

八日市きゅうりの特長は真っすぐであること、この姿が重要だと井口さん。曲がついているものよりも素直な味がすると聞けば、きゅうり好きとしては食べたくなる

のが本能。だが取材時は定植を終えたばかりの苗。次回に期待。お話を伺うと瑞々しさと品質の良さから、京都市場へ収穫した99%を納めている。ピーク時になれば、JAグリーン近江より毎日1700箱程を出荷する日もある。主な納品先である京都のスーパーや1本漬けなど様々な形で皆さまの元へお届けしている。

次に向かった先は東近江市市辺町のガラス温室。ご紹介いただいたのは八日市共販胡瓜部会の部長で、部内で1番の若手でもある中澤亮介さん。まず経歴から驚いた。前職は東京で電気防食の仕事に就いたが、全く分野の違う農業に興味を持ち転職を決めたのだそう。地元へ戻り就農に必要な実践的栽培技術や経営管理手法を習得するため、滋賀県立農業大学の野菜コースで1年間学んだ。その中でどの作物を栽培するか調べている時、八日市共販胡瓜部会と出会った。40年以上前から産地化が進められ、厳しい品質管理と安心・安全な栽培管理を実践し、30、70代の10名の部会員同士が切磋琢磨しながらブランド力を高めている姿を見て、ここにしよう、八日市きゅうりにしようと思った。

栽培するにあたり、部会員はまず品種を決めることか



定植した苗の状態を確認する中澤さん



側枝を紙テープで固定する風景
イラスト入りの出荷ケース

ら始まる。きゅうりは品種改良が頻繁に行われているので各自で試していく。中澤さんが今年選んだのは緑華（みどりのはな）。病気に強くて果実肥大は早く、初期から多収できるという優れたもの。緑華の穂木をかぼちゃの台木に接ぎ木し定植する。つまり根の部分はかぼちゃなのだ。それは病気や吸肥力が強いから。中澤さんの所で採用している摘心栽培は、主枝を摘心して側枝を増やし果実の発育をよくする方法。また側枝を固定する時はプラスチック製を使用するのが一般的だが、紙テープで留めている。万が一落下した場合でも土に戻るなど、環境に配慮していること。コストが高くてそこはこだわりたい。その後は温度や湿度、光など栽培環境を整えるために測定器を入れて数値化し、スマートフォンに届いた情報をもとに作業をコントロールする。3月中旬、夕方近くに再び取材へ。中澤さんのイラストと名が入った出荷ケースに整列していたのは真つすぐで色の濃い八日市きゅうり。思わず「きれいー」と声を上げてしまった。2日前から京都への納品が始まり、これからが本番。早速、温室に入ったが26度の暑さ。きゅうりにとって生育温度、人にとっては真夏である。作業の苦勞が想像できた。

だが収穫したら終わりではない。週に1度、部会員同士が抜き打ちチェックを行うなど管理の徹底ぶりには感服する。互いに指摘し合うことで品質のよいものを提供できるのである。

帰宅してすぐに八日市きゅうりを食べてみた。表面はもちろんだが、中の色も濃くしつかりとした味である。何もつけずにそのまま1本を丸かじり。そのおいしさに興奮したのを覚えている。中澤さんのおススメはぬか漬け、ぜひ試したい。

2014年、京都市場でのブランド力向上に努めてきたその成果が認められ、滋賀県の産地で初めて京都市から優良産地として感謝状を授与された。月に1度は夜明け前に滋賀を出発し、京都市場へ直接足を運ぶ販促活動などを行っている努力もきつと報われたことだろう。

中澤さんの今後の目標を聞いてみると、後継者を増やしていくことだと断言。家族経営では限界がある。人材を育成し、八日市きゅうりの魅力を広げていくこと。現在も八日市共販胡瓜部会ではテーマを決めて、月1回は勉強会を開くなど活発な活動は続いている。未来は間違いなく明るいのだ。

真夏の雪

高田 政明
エンジニア

子どもの頃、夏のおやつといえは泳いだ後に食べるかき氷だった。泳ぎ疲れた後だからか、あの時の甘さは本当に舌に嬉しかった。カップの上にふかふかに盛られた真っ白な氷。真夏の雪みたいだった。

瀬戸内海のそばで育った僕は毎年、夏休みは明けても暮れても弟と海で泳いだ。穏やかな波しぶきと燦爛と輝く太陽が最高の友達だった。そして海辺には必ずかき氷の屋台が建った。イチゴ、メロン、サイダー、みぞれ、どの味にしようかとその都度、真剣に悩んだものだ。屋台のおばさんは一見ぶっきらぼうだったけれど、手早い手つきで大きな氷をガリガリと削り、手品のようにふさふさとした真夏の粉雪をつくりだした。僕たちはおばさんの作業を見るのが大好きだった。

「お前の舌、真っ赤だよ」「お兄ちゃんこそ、ペロが真っ青！」かき氷の山を崩しながら、お互いに舌を出し合っては肩をつつき合って笑い転げた。両親が多忙だったため、夏休みに遊園地などに行くことはできなかったけれど、僕にとって1番の思い出だ。

最近は高級かき氷が人気だ。小豆や抹茶がたっぷり盛られ、マンゴーのような果物が添えられる。大人になった今も甘党の僕はこうしたかき氷も好きだが、1杯100円の素朴な味も忘れがたい。くたくたになるまで遊んだ後だから、夢のようにおいしかったのだ。

たかたまさあき

1979年、広島県に生まれる。滋賀県内の企業でエンジニアとして勤務。SDGsに関心が高く、ピリカの活動でびわ湖岸のゴミ拾いに参加している。

※このページへの投稿を募集しています。詳しくはHPを参照。

琵琶湖と人のものがたり《その3》

日本の辻、琵琶湖をゆく

かとう ひでお
加藤 秀雄

滋賀県立琵琶湖博物館学芸員

夏の訪れが感じられる頃になると、冬には雪が積もっていた比良の山々に積雪がかかり、琵琶湖の湖水浴場も人で賑わいはじめる。カヌーやウインドサーフィンを楽しむ人々の姿が湖上には見られ、はるか沖を琵琶湖の島々を巡る観光船が過ぎていく。

このように現在はレジャーの場として人々に親しまれている琵琶湖だが、歴史を紐解くと、この湖は長きにわたり日本列島の主要な交通路の1つであった。今から千年以上前に編まれた『万葉集』には、次のような和歌が

収められている。

高島の阿渡あとの水門みなとを漕ぎ過ぎて、

塩津、菅浦、今は漕ぐらむ

現代語訳すると「高島の安曇川の港を出発した船は、今は塩津のあたりだろうか、それとも菅浦のあたりだろうか」となる。この時代に琵琶湖で使われていた船がどのようなものだったのか定かではないが、1本の木を



歌川広重「瀬田夕照」。琵琶湖を航行する丸子船の姿が認められる。
出典：広重、保永堂板『「近江八景之内」「瀬田夕照」』(MET所蔵・パブリックドメイン画像)



上 琵琶湖博物館B展示室の丸子船。湖上交通の歴史とその製作技術を後世に伝えるため、船大工の松井三四郎氏らに作ってもらった。
下 比良山系のびわ湖パレイから望む琵琶湖。かつてはこの湖上を沢山の船が行き交った。



おり、琵琶湖を中心とする近江国を「日本の辻」と呼んだ。

最も湖上交通が盛んだったのは、江戸時代初期である。この頃には、1000隻以上の船が琵琶湖に存在したことが歴史資料からもわかっているが、この時代に活躍した船は丸子船と呼ばれた。丸木舟と混同されやすいが、マルコブネは何枚もの板を組み合わせて作る構造船で、最も大きいものは五百石(約75トン)の荷物を運ぶことが出来た。なお小型のものは、七、八石積(約1トン)で漁船にも使用されたという。若狭湾で陸揚げされた北陸以北の物資は、琵琶湖の丸子船で運ばれたあとに、大津で再び陸揚げされ、京や大阪などの大都市に入っていた。丸子船には白い帆がついており、北風が吹くと湖北の港から大津まで一気に進むことができる。塩津では北風のことをマキタと呼び、寒い時期にこの風が3日続けば、その年は商売繁盛、五穀豊穣間違いなしと言い伝えられている。

1671年に、瀬戸内海を通り、大阪で直接北日本の物資を陸揚げする西廻り航路が開拓されたため、湖上交通は一時期ほど盛んでなくなったが、それでも琵琶湖の

2つに割って中を割り抜いて作る丸木舟に、板を組み合わせて作る準構造船だったと思われる。そしてこの船に乗っていにしえの淡海人は、安曇川河口の港から湖北の塩津や菅浦を目指したのである。

塩津の地名は、若狭国の敦賀でとれた塩が集まる港だったことに由来すると言われている。ここに集められた塩は琵琶湖を行く船に乘せられ、都へと向かった。『日本書紀』には、敦賀の塩が天皇への貢物だったことを伝える記事も見える。塩津の他に、海津、今津、栗津、そして大津といった「津」のつく地名が、琵琶湖岸には数多く残っているが、これらは全て港として栄えた場所である。

先に引いた和歌は、湖西から湖北に向かう船のことを詠んだものだが、若狭から「塩の道」を通って湖北の港に入り、南に向かう人と物の流れは、日本の歴史を語る上でも重要な意味を持っている。滋賀県生まれの地理学者・小牧実繁は、「この古い湖国は、いつの世でも人間が往来してつねに文化の交流が行われてきたところである。日本文化で江州を通過しなかったものは、ほとんどなかったとまで極言できるのではなからうか」と言っ

主役は丸子船であり、その姿は歌川広重の描いた浮世絵「近江八景」にも認めることができる。白帆を掲げて琵琶湖を行き来する丸子船の姿は、社会を生きる私たちにとって、ゆったりしたものに見える。

このどかな琵琶湖の風景も時代の流れと共に失われていき、丸子船の姿も昭和時代に消えていった。湖上を行く船の多くは動力化し、その素材もFRP(繊維強化プラスチック)製のものになっていく。琵琶湖を最後に航行した丸子船は、琵琶湖博物館に展示してある百石積の船だが、1995年3月に行われた進水セレモニーの後、この船が博物館に向かって湖上を進む姿を見て涙を流す人もいたという。

日本の辻、琵琶湖を盛んに行き来した丸子船も、今はその歴史的な使命を終えて、移りゆく湖と人の暮らしを静かに見つめている。

加藤秀雄

専門は民俗学。大分県出身。高校卒業後に上京して民俗学を学ぶ。人生の第二章は、滋賀で民俗研究に打ち込みたいと考えている。

里山の花

たんざわあつき
丹澤愛継

叶匠寿庵グループ 芝田果徑

私の仕事は、6万3千坪ある農工ひとつの里山・寿長生の郷の自然を守り育てる仕事だ。農工ひとつについても話したいし、この場所の由来や意味についても話したいけれど、今日は郷の花の話をする。日本の花の話だ。

寿長生の郷には、私が名前を確認しただけでも340種の樹木と337種の草が育つ(きちんと専門家の目になって調査すればあと100は加算されるはずだ)。つまり1年を通して600種以上の花が咲くのだが、これはなかなか世間には通じない。マツの花が咲きました、クリが見頃です、と言っても人は納得しないだろう。花はきれいなもの、美しいものでなければいけない。

クナクズの量感と花の色合いは今も間違いなく美しい。けれど現代、至る所で繁茂し駆除対象ともなるこれら植物の花は、花とは呼ばないのだ。

一方およびおり数えたのだから、丹念に調べたというのではなく道端から見て目についたのだろう、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウの4つは各地域の草原から姿を消しつつある。強靱なクズやスキと絶滅危惧種のキキョウが併存する環境を憶良は詠み、それは当時の人々の共有の風景としてあった。その環境とは、定期的に人が手を入れることによって森林化を押しとどめ、多様な草木が共存し得る里山環境、つまり寿長生の郷のような場所だろう。

いま、国内には4000種にのぼる動植物が絶滅の危機にあり、その半数は里山に結びついた生きものだという。

郷では、春より先にウグイスカグラが咲きだし、夏にはコバノギボウシが木陰に群れ、秋を待たずにイヌタデやミゾソバが路傍を覆う。私は彼らが好きだ。だが、パンフレットや集客媒体として選ぶのは彼らではない。

憶良の時代から今日まで継がれてきた命、形。その総

では、ウマノアシガタはどうだろう。つややかなレモンイエローの五弁、ふくよかなシベの愛らしさ。またツユクサのあの青。私はよく、卵がもし1個500円だとしたら、人はもっと美味しくありがたがって食べるに違いないと思うのだが、ツユクサも、もっともったいぶって咲けば、人は飛びつくのではないかと思う。

それでもツユクサやウマノアシガタを、寿長生の郷の花のひとつに数えることを私はためらう。いまはまだわかってもらえないと思うからだ。ふだんあまり目にしないもの、手の届かないものを人は求める。

秋の七草は、そんな花に対する時代と世相を写しだす好例だ。

萩の花、尾花(スキ)葛花、なでしこの花、おみなえし、また藤袴、あさがおの花(キキョウ)

秋の野に咲きたる花をおよびおり(指折り)かき数えれば、と1300年前、山上憶良は頭の歌で言っている。その時代、スキやクズは花として認識されていたのがわかる。秋の空を指してそよぐスキの穂、エキゾチック

体である日本の風景を、未来の人たちにも見てもらいたいと思う。脈々とした先人の生業の末、私たちが受けてきたもの、必要なものはすべてはじめから与えられている、と思えるほど満ちて豊かな感覚を新しい人たちにも渡したいと思う。

先日嬉しいことがあった。SNS担当の若い後輩がタネツケバナの写真を持ってきて、いつ咲きますかと訊ねる。前年のアンバサダーさんが郷で撮ったものでインスタグラムに投稿したいのだが、タイミングがわからないのだという。わずか3ミリの白い小さな花を淡い光で捉えた写真だった。スマートフォン片手に足元の宝探しをする、そんな時代がやってきたのかもしれない。



ウマノアシガタ、それを撮るヤブキリ
写真撮影 | 丹澤愛継

茶「道」の心遣い

ごとうりょうた
後藤良太
第二営業部

茶道が趣味である。大学生のときに始めて以来継続している。茶道には数多くの魅力がある。例えば日本の伝統文化を広く内包する芸術文化であること。書道・華道、香にも接し、各文化の知見や見識を広げることができる。他にはおいしい和菓子をいただける。純粹に甘党なこともあるが、茶席の四季を彩る役割としても和菓子は必須だ。

例をあげると枚挙に暇がないが、私が考える最大の魅力はお客様をもてなすための心遣いの部分にある。茶碗を温める、空腹のまま茶を服さぬよう菓子を提供する、夏の間は風炉釜を構えて主客から火口を遠ざける、煮えた湯に水を指し、服加減を整える。用いる道具にも趣向を凝らし、茶道具を厳選する。設えから茶を点てる所作に至るまで、お客様のことを一心に考え心遣いを施すのだ。これこそが茶道の最大の魅力ではないだろうか。それを踏まえると、常に一歩先を見据えた心遣いを思慮することは、日頃の行いにも活かってくるはずだ。こうして筆を執る最中でも、どんな心配りができるのか模索するばかりである。

将来の目標は経験、未経験を問わず誰でも参加できる茶席を設けることだ。興味があっても、作法が多く逡巡してしまう人もいるだろう。そんな方のために茶席を構えたい。ふらりと立ち寄れて、会話をしながら楽しめる。気軽に茶道に触れあえる、心遣い溢れる空間を設けたいと切に願う。理想の茶「道」は未だ道半ばである。

今こそ伝えたい舞台芸術の魅力《その3》

ここに劇場があつてよかった

ばん てつろう
阪 哲朗

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 芸術監督

今年の4月、びわ湖ホールの3代目の芸術監督に就任したが、僕は「ここに劇場があつてよかった」と思つてもらえるような場所にしたいと思つている。

劇場事始め 「ここに劇場があつてよかった」のルーツ

1990年に京都市立芸術大学を卒業してその夏に旅行で渡欧。そのままウィーンに留学することになったが、2年生の時に職を得て休学。その後、2017年に帰国するまで人生のほぼ半分をドイツ語圏(オーストリア2年、

スイス5年、ドイツ20年)で過ごしてきた、例えばあつているかは分からないが、『逆輸入品』のような僕だ。

中でも印象に残っているのは、最初の職場であるスイスのビール歌劇場。人口4万人程の街の小さく可愛い劇場で、すべてをここで学んだ。5年間で約30演目、コンサートも入れると指揮回数は200回ほど、オペラだけでなくミュージカルやオペレッタも山のように指揮した。今でこそ、弱冠24歳のひよっこ指揮者にはとても贅沢な環境だったと振り返れるが、ハイジくらいしか知らない



カメラは趣味の1つ。びわ湖ホールから湖面を望む | 写真撮影：阪哲朗



上 レーゲンスブルクのシンボル ドーム(大聖堂)
下 レーゲンスブルク郊外 ヴァルハラ神殿にて
2014年、ゲネプロ(公演前の通し稽古)の様子
野外ステージで、本番では花火などの演出も



スイスで社会人1年生、当時は必死だった。

ビール歌劇場のオーケストラ・ピットは全体で30人くらいしか入れない小さなもので、足りないパートをどう扱うかが知恵の絞りどころだった。演奏だけでなく、楽譜の制作までもが僕たちの仕事。指揮者兼ピアニストは3人しかおらず、時にはチェンバロやピアノを演奏しながら指揮しなければならなかった。もともと、これはオケと鍵盤楽器のタイミングの違いを会得するのに大いに役立っており、今も、当時を忘れないように、機会があれば弾き振りを続けている。

本番前の15分は、まさに修羅場のような。歌手や奏者が何らかの事情で替わる……くらいならまだ良い方で、指揮者が車のパンクで来られないから代役をとるか、バスで移動した先でオーボエのパート譜が無い!と運搬係が騒ぎ出し、僕のスコアをオーボエ奏者に貸したまま演奏をしたことも。劇場が停電で真っ暗になった時にはさすがに万事休す、これには暗闇の中で笑ってしまった。このような事故がたびたびあると度胸も据わり、ハプニングこそ楽しまねばという気になってくる。当然ながら本番前に緊張などしている暇もなく、現場監督として対処に

追われ、時間が来るとハイ行つて!と指揮台に送り出されていた20代。今思えば、本当に生きた学校だった。このビール時代、僕は「オペラ座の怪人」よろしく、朝から晩まで、寝る時以外はずっと劇場で、「ラ・ボエーム」の舞台セットのような当時住んでいた屋根裏部屋より、よっぽど詳しかったかもしれない。

芸術監督の仕事

これまでに経験のあるドイツでの音楽総監督(※GMD)としての仕事はどうであったのかを少し書いてみたい。

GMDの「主戦場」は当然のことながら歌劇場だ。年間の公演プログラム、オーケストラや室内楽のコンサートのプログラム作り、客演演奏家、指揮者の招聘、自分の指揮活動で専属歌手や合唱団、そしてオーケストラのレヴェルの維持など、良い環境作りに邁進せねばならない。欠員が出たらオーディションも行い、必要な時には市の予算会議にも出向いた。良い音楽スタッフを作るためには指揮者やピアニストのオーディションも必要で、いつもスカウトのように目と耳を大きくしていた。強力な人事権も併せ持ち、時に楽員や歌手の肩叩きもしなければならなかった。

ところで、指揮者が付くポジションでもシンフォニーオーケストラなどは「監督」が多い中、歌劇場は「総監督」となる。「街の音楽監督」としての役割のためではないだろうか。その街の音楽振興に携わるのだ。たとえシンボリック存在だったとしても、少しオーバーに言うとその街の音楽団体すべてのトップの役職だ。

かのバッハが洗礼を受け、ルターが新約聖書を編纂したアイゼナハで4年、ローマ帝国の人たちが作った世界遺産の古い街、バイエルン州レーゲンスブルクで8年、計12年のGMD稼業を勤めてきたが、日本での「監督」のポストは今回が初めて。どうなるか楽しみだ。

阪哲朗

ウィーン国立音楽大在学中にビール歌劇場専属指揮者に就任。その後欧州の歌劇場で音楽総監督等を歴任。2023年4月より、びわ湖ホール芸術監督、京都市立芸術大学教授、京都市出身、大津市在住。

※GMD：General Musik Direktorの略称



地上の稲を結実させる稲妻（夫）。それは、豊穰をもた
らせるものでもあります。自然が織りなすこの世界を、
人は鋤・鍬をもって耕し、新しい道を切り開くために創
造力を働かせます。叶匠壽庵人は「農工ひとつ」を合言
葉に、百姓（おおみたから）として菓子づくりに接し、
先を見据えたモノづくりを考えます。この印は1つひと
つの命を大切にし、その持つ力を最大に発揮させ、生か
していく能力を拓いていくという意志を表現しています。

写真撮影 谷口菜穂子



寿長生の郷では、6月下旬
から7月にかけて、梅の収穫
の時期を迎えます。1年間、
丹精込めて育てた果実もい
よいよ酒蔵へ運び込まれ、
梅酒の仕込みに入ります。
今号では色とりどりの果物
をシャンパングラスにふん
だんに入れ、ゼリー寄せに
してみました。山からシダ
を取ってきて天然のティーブ
ルクロスに仕立て、キンキ
ンに冷やしておいたゼリー
をお客さまに振る舞います。
食されている時の笑顔を見
ると、こちらも嬉しくなり
ます。

叶匠 壽庵

編集 候記

記 池田典子

—— 梅林の木陰で ——

木々の緑が日ごとに色を深め、初夏の日差しが心地よい時季となりました。梅の実が育ち、今年も収穫できる歓びを皆さんと分かち合える日が待ち遠しく感じます。

さて今号から、「寿長生の郷人コラム」を開始しました。郷には菓子づくりや、販売以外の様々な仕事を持つ職人が存在します。見過ごしがちな当たり前のようにあるものに携わり、そと和菓子を引き立てたり、空間を形成していたり。そんなお仕事をピックアップして紹介してまいります。

この里山には、菓子の工場があり、毎日餡や餅、夏には水羊羹が

生まれています。それらに必要な水は、昔からここに住む人びとが守り続けてこられたもの。それをお裾分けでいただいています。地域の掃除には参加し、交流を深める。こうして続いてきた行事を今、改めて見つめ直し、考えています。人と人との触れあいや会話は、この自然の下で受け継がれ、日本の文化を形成してきたのではないかと、先人たちの歩みをたどり、今ある課題を乗り越え克服する創造力を鍛えるには、自然に身を置くことが近道ではないのか、と。

これからも私たちは里山とともに和菓子に向き合ってまいります。

作家 かわもとまりこ
河本万里子

絵

日本画家。1975年、滋賀県高島市生まれ。
嵯峨美術短期大学(現 嵯峨美術大学)日本画専攻科修了。
江戸時代の円山応挙より京都の画壇に受け継がれてきた『写意(写生を通して物事の本質をとらえる)』の伝統に学び、生命のもつ瑞々しさを四季折々の植物を通して描く。
京都嵯峨芸術大学非常勤講師を経て、現在大阪にて作家活動中。



表紙絵 せいすい
「青翠」

日本で古くから親しまれる朝顔は、元は葉草として中国から渡来したそうです。
江戸時代の大ブームで観賞用の園芸品種が沢山生まれたそうですが、野趣溢れる原種系の青い朝顔に、夏の風情を感じ惹かれます。

題

タイトル うめ
『烏梅』

近江も多く読まれている『万葉集』。万葉仮名では梅を「烏梅」と表記されています。近江の歴史と寿長生の郷の梅林を重ね合わせ、タイトルといたしました。

広報誌『烏梅』の定期購読について(無料)

広報誌『烏梅』は6月・11月に発行いたします。定期購読をご希望の方は官製ハガキに郵便番号、住所、氏名、電話番号、年代、烏梅希望と書いて右記住所までお送りください。その他、叶匠寿庵HP、お電話にて承っております。

※9月・2月には季節のお便りを差し上げます。

※国内発送に限らせていただきます。

※配送業務をディーエムソリューションズ(株)に委託しております。

個人情報に関係法令を遵守して取り扱います。

定期購読
お申し込み
フォーム



叶匠寿庵
公式HP



『烏梅』第42号2023年夏
発行日 2023年6月1日
発行所 株式会社 叶匠寿庵
発行人 芝田冬樹
編集長 池田典子
編集人 丹澤愛継
酒井綾子
岡田千穂
吉上涼一
関野芽衣
印刷所 佐川印刷株式会社
表紙・絵 河本万里子
株式会社 叶匠寿庵
本社・工場
〒520-2266
滋賀県大津市大石龍門4丁目2番1号
TEL 0120-257310
(土日祝休業)
FAX 077-546-3133
HP <https://kanou.com>